

第3回授業研究会

日 時 平成30年 1月16日 (火)
会 場 群馬県立桐生南高等学校
教科・科目 芸術科・音楽I
題 材 名 ベートーヴェンからのメッセージ
～「第九」の魅力を探ろう～
指 導 学 級 普通科 1年C組
授 業 者 鈴木 香奈子 教諭



1 開会行事

(1) あいさつ

①廣澤 秀伸 先生 (群馬県高等学校教育研究会音楽部会長)

学習指導案を拝見すると、エキスパート活動やジグソー法を取り入れた非常にユニークな取り組みとなっていることが分かる。こうした活動での研究授業は初めての試みである。

今年度の第2回授業研究会は特別支援学校で行われ、授業研究の視点がこれまでと変わり、音楽の授業についてまた別の角度から考えることができた。本部会のHPを試行的に運用してこうした授業研究会の様子などを掲載している段階である。第1回、第2回の授業研究会や夏季研究会の内容を振り返りながら、さらに今後の勉強に役立ててもらいたい。それらを踏まえて進化した形での授業研究会を期待する。

②高張 浩一 先生 (群馬県立桐生南高等学校校長)

本校は1学年4クラスで小規模の学校である。素直で真面目な生徒が多い。高い学力、強い部活動、充実した学校行事を掲げている。鈴木教諭は1学年の担任であり、普段の授業から教材研究をしっかりと行っている。吹奏楽部や生徒の指導など前向きに取り組んでいる。今日もよい授業を行ってくれると期待している。本日の研修が参加者の方々にとって実りの多いものとなることを祈念する。

③島田 聡 先生 (群馬県教育委員会高校教育課指導主事)

県教育委員会をお願いしている「ステップアップサポート事業」も3年目を迎え、全県的に授業改善を推進していただいていることに感謝申し上げます。また、本部会の授業研究会が今年度から年3回の開催となり、計画的・継続的に開催されていることに、重ねて感謝したい。

鑑賞の題材において、生徒と音楽とをどのような出合わせようかと悩まれている方も少なくないと思われる。鈴木教諭の授業の参観を通して、教師側の指導方法だけではなく、生徒側の視点でどのように学んでいるかを見てほしい。また、そこから、音楽の学力を身に付けさせるためにどのように授業を変えたらよいか、授業改善の糸口を見つけてほしい。授業研究会での協議も含めて、共に勉強させて頂きたい。

(2) 講師紹介 (清水副部会長)

臼井 学 先生

文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官

国立教育政策研究所教育課程研究センター研究開発部教育課程調査官

(3) 授業説明 (鈴木教諭)

今回の授業で取り上げるベートーヴェン作曲の交響曲第9番、通称「第九」は非常に有名な曲であり、生徒もどこかで耳にしたことがあるだけでなく、平和や統一の象徴といった様々な文化的・歴史的背景が基になっているものである。そうした様々なことを、鑑賞を通して感じ取れる題材にしたい。

音楽を形づくっている要素に着目しながら、ベートーヴェンがどのような思いやメッセージを伝えたかったのかを考えられるようにしたい。さらにそこから、「あなたはその音楽にどのようなメッセージを込めたいか」、という生徒自分のことに向かえるようにしていく。そこから生活や社会の中の音や音楽、音楽文化と豊かに関わる資質・能力の育成を目指したい。

生徒の授業への取り組みは素直で真面目ではあるが、自分の意見の根拠を見つけないと自信をもって発言できない生徒も多い。指示をされたことはできるが、自分で考えながら自由に取り組む場面では、消極的になってしまう生徒もいる。

鑑賞については、自分の考えを友達と共有したりすることはできるが、作曲者の思いや生き方などと音楽とを結び付けたり、自分自身のことと重ねたりといったことまでは考えられていないようである。ESD(持続可能な開発のための教育)に関わらせて、詩に込められている価値観や人間性の尊重などにも触れ、これからの人生を考える上で役立つような授業にしていきたい。

本題材で扱うワークシートは4枚あり、本時では前時で記述した2枚目を基にしてエキスパート活動で3枚目を記述できるようにする。ジグソー法では、1人ではなかなか解決が難しい課題に対してエキスパートを養成し、そのエキスパートが調べたことや考えたことを組み合わせることで課題の解決を図るものである。

本時は3時間目の授業であるが、前時の2時間目で既にエキスパート活動を行っている。第1～3楽章の主題の一部が第4楽章の冒頭に演奏されることに気付けるようにするために行った活動である。本時では、生徒それぞれがエキスパートとなって分かったことを各グループで発表し、その上で第4楽章の冒頭を鑑賞し、作曲者のどのような思いが込められているのかを考えられるようにしたい。本題材の最初の時間に作曲者からのメッセージを考えた時よりも、学習を通して生徒の考えがより深まるようにしていきたい。

2 研究授業 指導案参照

3 授業研究

(1) 授業者より趣旨説明等 (鈴木教諭)

1時間の授業で扱う内容が盛り沢山になってしまった。ジグソー法を使おうということで、第1～3楽章を味わう段階でグループを分けたが、音楽を形づくっている要素でグループを分けるなども考えた。しかし、第4楽章の冒頭を鑑賞した、自分がエキスパートとして担当した楽章が演奏されていることを気付かせたかった。

別のクラスで本時の授業内容を先行実施した際には、生徒はそのことに気付けなかった。そのため今回は楽譜の提示の仕方を変えて工夫を行った。また鑑賞する活動を1回省きもしたが、それでも説明が多くなり時間が足りなくなってしまう。生徒が考えて、話し合っ、意見を交流するクロストークを行いたかった。

本時の目標である第1～3楽章のよさや美しさを味わう場面でジグソー法を用いた。それは、自己肯定感が低い生徒に自信をもって発言できるようになってもらいたいという意図もある。エキスパート活動の際からリーダーを決めて、担当する楽章が自分の楽章だと誇りをもってプレゼンテーションできるようにし、自己肯定感を高



めることへも繋がりたいと考えた。

次時の授業では、作詞者であるシラーの詩の内容や、作曲者や作曲された状況などの背景と関わらせて、「第9」の紹介文を書く活動を行う予定である。本時では第4楽章の冒頭である「歓喜の主題」の前の部分を鑑賞したが、次時では「歓喜の主題」の先で、その主題がどのように変化し、作曲者はどんなメッセージを込めたのかを鑑賞を通して理解できるようにする。それを基に、自分はメッセージとして後世に何が残せるかということを考えられるようにしていきたい。

生徒が鑑賞をしている場面で、「これだよ」と話を始める生徒や、話をせずじつくりと聴いている生徒など、様々な鑑賞の態度が見られた。またエキスパート活動の際にグループでの説明の進捗が異なり、授業を行う上で難しさを感じた。そうしたことについてもご意見を頂きたい。

(2) 研究協議

研究授業を観る「研究協議の視点」を研究係が提示し、各グループで1～2つの視点を選びながら協議をする。

「研究協議の視点」

- 本時の目標は達成できていたか
- 課題の質やレベルは適切であったか
- 評価の計画は適切であったか
- 主体的・対話的で深い学びになっていたか



1班：東（県立前橋）、黒岩（高崎）、前島（あさひ特）、武井（伊勢崎商業）、饗庭（市立太田）

研究協議の視点：主体的・対話的で深い学びになっていたか

- ・ジグソー法が新しい手法で、指導する側も面白いと感じた。鑑賞領域だけでなく表現領域まで含めて様々な学習に生かせそうだと感じた。
- ・もう少し、グループで話し合う時間、音を聴く時間を充分にとってもよかったのではないかな。全体的に忙しい印象だったので、最後にまとめる活動は次の授業に回してもよかった。
- ・じっくり聴きたい生徒と曲の説明などについて話しながら聴きたい生徒がいるので、「静かにじっくり聴く時間」と「話しながら聴いてよい時間」を分けたいのではないかな。
- ・授業準備が素晴らしかった。ワークシートやスライドに楽譜があり、それらを見ながら聴くことができたのがとてもよかった。ICTの資料についても、今後も継続的に使っていけるものだと感じた。鈴木先生の準備と思いにより、生徒の主体的・対話的で深い学びが生まれていた。
- ・内容については、第1楽章～第3楽章に「歌詞をつける」という発想がよかった。
- ・グループ活動では、男女を混ぜてもよかったのではないかな。クラスの雰囲気によって工夫できるとよい。
- ・楽曲の背景など伝えたい大切な内容については、スライドで見せて説明するだけでなく、手元に残る資料を配布してもよかったのではないかな。

2班：根岸（西邑楽）、井上（藤岡中央）、伴野（太田東）、伊藤（北海道・別海）

研究協議の視点：主体的・対話的で深い学びになっていたか

- ・それぞれの生徒が1～3楽章のエキスパートになり、想像力豊かに自分の言葉で紹介していた。一方で、各楽章はその人のもので終わってしまっていた。
- ・ステップを踏んだワークシートが分かりやすく、他の楽章と同じ作りになっているので理解しやすい。

- ・楽章ごとに分けたり、Sceneの選定を行ったりしたことが適切であった。
- ・生徒が記入したワークシートから、前時の取り組みが興味深いと感じた。
- ・生徒それぞれの鑑賞のポイントが異なるが、前時で各要素に着目させることで、本時の聴く視点の方向性が整えられていた。
- ・生徒同士の対話があることで、自分の意見を確信しながら次の活動に進めていた。
- ・男子と女子によって鑑賞の仕方、言葉の表現の違いがある。
- ・少し授業のペースが速く、1時間に詰め込み過ぎた感じがした。
- ・各楽章のエキスパートの説明を聞いた上で、そのよさをじっくり味わって鑑賞する時間が欲しかった。
- ・自分の楽章だけでなく、他の楽章も面白い、自分の班としての確信につながるとよかった。
- ・楽譜を活用して各楽章の主題を歌うなど、各Sceneがもう少し生徒の中に入った上で鑑賞すると、よりよさが味わえた。
- ・授業内容に生徒全員が参加し、活気のある鑑賞の授業だった。
- ・タイマーを使うことで、生徒が考えたり意見交換したりする時間を、無駄なく有効的なものにしていた。
- ・WSやパワーポイントに工夫が見られ、綿密な教材研究と授業準備が感じられた。

3班：金田（富岡東）、松平（尾瀬）、勝山（万場）、中澤（高崎北）、大小原（高高特）、戸松（吉井）

研究協議の視点：主体的・対話的で深い学びになっていたか

①鑑賞中の活動について

- ・鑑賞に対する生徒のレベルの差を埋めるのは難しい。班の編成を考え、質の変化、均一化を図る方がよい。
- ・鑑賞について視点や方法を教師より提示することで個々の満足感が得られる。
- ・グループによってイメージが様々なので、意見を全体で共有する時間があってもよいかもしれない。

②主体的・対話的で深い学びになっていたか

- ・せっきくの活動なので、全体に対して発表できる機会があれば学びの共有化ができると思う。
- ・ワークシートの利用がスモールステップの達成感を得られて良かった。
- ・このワークシートにはスコアが載っているが、生徒達が読み取れているかが疑問だった。主題を楽譜で追えるのか。教師側の指示が必要ではないか。
- ・生徒達は目的をしっかりと捉えてすぐに反応できるので力のあると思ったが、読譜力を身に付けるにはやり方と時間が必要だ。
- ・全体に対する情報の共有があってもよい。
- ・読譜については時間をとって主題を歌ってみるなどの活動があってもよい。授業の始めにベートーヴェンについての理解を深めてから、メッセージを考えてもよいかと思う。

③ワークシートについて

- ・生徒だけで主体的・対話的な授業にするためにワークシートをどう利用し、その情報をどう整理して提示するかが大切だと感じた。
- ・ベートーヴェンの第九は教科書に全て載っているのだから、それを活用してはどうか。
- ・教科書は全てが書かれているので生徒達が鑑賞する際、感動の要点をこちらで導きにくい。独自のワークシートを使用することにより、授業の流れを作りやすい。教科書は答え合わせ的に利用するのも有効ではないか。
- ・自分の体験と結び付けた深い鑑賞をするためには、ワークシートを上手に利用していく必要がある。

④グループ毎の活動の視点の違いについて

- ・最初のグループを解体して、もう一度他のグループを編成するなどの工夫も考えられる。
- ・スコア(楽譜)をどう見るかといった有効性について、指導者から助言があると生徒の思考が整理されると思う。
- ・ワークシートの情報が多いので、整理する必要もあった。
- ・鑑賞については「聴く」と「話す」を分けるようにするとよい。

4班：角田（榛名）、富岡（安中総合）、野口（大間々）、斎藤（沼田女子）

研究協議の視点：評価の計画は適切であったか 主体的・対話的で深い学びになっていたか

- ・ジグソー法は思い返せば昔からやっていた手法であると感じたが、楽章ごとに部屋を分けて鑑賞し、グループワークをさせてエキスパートをつくるなど、今回はその内容が非常に良かった。
- ・音源の準備が充分なされ、聴かせたい部分だけをまとめて聴かせるのは思いきりがよく、スピード感もある。
- ・活動ごとに時間を区切る際に、タイマーが有効的に使えていた。
- ・エキスパートになる活動の中で、生徒に自己肯定感が生まれていた。
- ・ワークシートは生徒の思考に沿っており、丁寧に準備されていた。
- ・授業全体に気ぜわしさがあつた。全体的なスピード感の中で、生徒自身が深く学べたことに気づけたかどうかは気になる。
- ・ワークシートにどんなことを書けばどの程度の評価ができるか、ワークシートに表れない発言をどう拾うかが課題だと感じた。
- ・記述が得意であつたり発言ができたりする生徒とそうでない生徒など、それぞれの特性を評価に繋げたい。



5班：小川（四ツ葉）、藤島（関学附）、五十嵐（長野原）、小川（利根商業）

研究協議の視点：課題の質やレベルは適切であったか 主体的・対話的で深い学びになっていたか

- ・全体的に生徒がしっかりと集中をして話を聞いていた。
- ・進度は速いように感じたが、授業者の明るさや優しく支える雰囲気があり、生徒が置いていかれることもなく授業に取り組んでいた。
- ・課題の質やレベルに対して、少し難しいように感じられたが、結果的には適切だったのではないかと思う。授業の組み立てがよく練られており、深く感じ取れる生徒とそうでない生徒がいながらも、深く感じ取れる生徒の話聞くことで、そうでない生徒も理解し、納得している様子が伺えた。
- ・今回の教材については4楽章のみに焦点を当てがちではあるが、1～3楽章を聴くことで4楽章がより深まる。時間はかかるかもしれないが、ここまで深くできて素晴らしいと思う。また、授業者が細かくワークシートをチェックすることで生徒が自信をもって発表することができていた。

(3) 指導・助言等

臼井 学 先生

文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官

国立教育政策研究所教育課程研究センター研究開発部教育課程調査官

十分な準備と丁寧な指導、そして熱い思いの伝わる授業であった。今後の授業づくりにおいて示唆に富むものであった。ワークシートも工夫されており、同じ音楽であっても最初に聴取して考えたことと、最後に鑑賞して考えたことを比較することができるようになっている。音楽は鑑賞すればするほどその捉え方は変わっていき、

学習が深まっていく。予めその音楽について知っている知識があったとしても、新たに気が付き、発見できることがある。それが音楽の聴き方の面白さである。鑑賞する音楽は変わらないが、聴いて受け取る側が変わっていき、そうして変わっていく自分が自覚できるメタ認知の経験の積み重ねが、音楽の学び方である。

音楽の知識、技能は更新されていくものである。既存のものであっても、出会う度、情報が入る度に更新されていく。中教審の答申では、高等学校芸術科（音楽）における「創造的な表現と鑑賞と能力」の大切さについて触れており、生徒自らが音楽や作曲者に働きかけ、自分と音楽の間に何か生まれる、これが創造的に味わうということである。

学習指導案には本時の授業の発問において、作曲者である「ベートーヴェン」を主語として記述されているが、授業者の意図としてはそれを「あなた」という生徒自身を主語に置き換えているということが伝わってくるものであった。鑑賞で感想等をまとめる活動では、例えば音楽を鑑賞しなかったとしても、作曲者の背景や音楽の構造などこれまで授業の中で指導された文字による情報で知り得た知識で記述できてしまうこともある。そうした知識を知った上で、生徒自身である「あなた」の聴き方はどのように変わったのかを考えられるようにしなければ、その音楽を他人事のように聴いてしまうことになる。作曲者「ベートーヴェン」からのメッセージだけではなく、それを受け取った結果として「あなた」はどのように考えるのかを最後に記述するというように、主語をそれぞれの学習場面に応じて選びながら発問していくということも大切である。

授業研究の視点として示されたそれぞれの観点について、当然のことであるが本時の目標は達成できた生徒もいるし、達成できなかった生徒もいる。1時間の授業で全員の様子を見ることができないこともあるからワークシートを用いるのである。普段の授業では生徒個々の様子を細かく見ていくことは難しいが、今回のような研究授業では、参観者は、普段とは異なる視点から生徒を見ることができる。目の前の生徒に焦点を当てると、いつも授業をしている時には分からなかった隠れたところに新しい気付きがある。それが普段の授業に生きていくのである。

授業における課題の質やレベルの設定については適切であった。今回は指導の意図とその内容がよかったと感じる。生徒に与える課題について、生徒からの反応としてどのレベルの反応を期待しているのかによって、レベル設定の難しさは異なる。生徒への課題の内容と共に、それに対する生徒の反応との関係性を考えてほしい。

評価の計画については、音楽への関心・意欲・態度の②にある「主体的に取り組もうとしている」という評価項目一つだけでもよかったかもしれない。2観点両方を2時間累積して評価していくことは難しいので、次の授業で鑑賞の能力を見ることが分けるとよい。評価の方法については、観察はとても大切である。授業の最後に生徒がワークシートに記述した言葉だけではなく、それを導き出すまでの過程で生徒の中に何が起こったのかは観察で見ることができる。また評価の規準について、指導者が予めB評価となる生徒の状態をある程度幅もたせて考えておくことが必要である。B評価となる生徒については、それに含まれない生徒がいるからB評価となる生徒が判断できるのである。それを越えて達成できている生徒はA評価、まだ課題のある生徒についてはC評価というような3段階で評価をする。計画段階では、生徒がどのような状態となるのかという想定をしっかりと考えておくことが大切である。

授業展開においては、生徒が自分の鑑賞した楽章を1分ずつ他の生徒に説明するという場面でジグソー法が使われていたが、それを含めて後にその楽章を全体で鑑賞する場面までをジグソー法を取り入れた学習と考えるとよい。説明されている1分間は、生徒は一生懸命生聴しており、その後の鑑賞においてはグループによって様々な鑑賞の仕方がある。例えば、じっと聴いていたり、記入したワークシートを見ていたり、グループ内でやり取りしたりなど、同じ鑑賞という学習であるが聴き方の形は多様である。そのため、それぞれの生徒が鑑賞する際に、どのようにジグソー法を取り入れて学習を深めるのかが大切である。鑑賞する時間の使い方を丁寧に説明す

ることで、グループで学習するという形態を有効に使える。

本時の最後の場面で、「第4楽章では作曲者がこれまで出てきた各楽章の主題を否定している、そして歓喜の主題を発見している」という気づきや驚きといった言葉を生徒の側から引き出したい。今回の授業では、「第4楽章は歓喜の主題より前の部分もあるが、そこは聴いたことがない」という動機付けで、曲想が変化した回数を指で数えるという活動であった、回数ではそれぞれの生徒でばらつきが出てしまう。その音楽にどのような変化が起きたのかではなく、変化した回数の方に気持ちが集中してしまう。例えば、これまで各楽章を鑑賞してワークシートにまとめたことが役に立つように、それぞれのエキスパートの立場で聴くということを生徒に伝え、生徒が気付いてほしい方向に向かう発問をする。一つの楽章が演奏されると次には他の楽章が演奏されるのではと予想できる生徒もいる。もちろん気付けない生徒もいるだろうが、鑑賞した直後に曲想の変化の回数を生徒にきいてしまうと、生徒は回数を当てるのが学習のテーマであると勘違いして、各楽章が演奏されたことに気付いた生徒も、そのことについては発言できなくなってしまう。指導者の発問は生徒の意識を方向付けるものである。さらに、「自分が担当した楽章が演奏されたら教えてあげて」というように、生徒同士の対話の場面を作れるとよかった。

授業の展開の初めで「自分の楽章を売り込め」という発問が適切で、それが第4楽章で作曲者も各楽章を売り込んでいるということに繋がる。しかし、「売り込んでいるように聴こえない、感じないのはなぜなのか」を考えられるようにし、そこから、音域や使用されている楽器の特徴に気づき、歌詞が付いた音楽へと繋がることに関連させたい。発問によって生徒の意識を向かわせたい方向へ導き、生徒がそれを見つけたり納得したりするような授業展開ができるとうい。発問を考える際には、指導者から伝えたいことと生徒から引き出したいことの両方があるということ意識する。

最後に生徒が記述した意見を見ると、「歓喜」というものの質が変わっていくことが分かり、そこがこの授業の素晴らしい点である。冒頭でも述べたが、作曲者の背景などの情報を詳しく伝え過ぎてしまうと、その情報を基に感想を記述してしまう生徒や、それだけで終わってしまう生徒もいる。鑑賞した結果「あなた」はどのように考えるのかということを生徒が意識できるようにしてほしい。本時は、「各楽章を否定した結果出てくるこの4楽章は何なのだろう」という発問を投げかけ、次時へ繋げておくようなまとめでもよかった。

6 参加者 (敬称略・順不同)

廣澤 秀伸 (前橋西)	大熊 信彦 (太田女子)	清水 郁代 (二葉特)	臼井 学 (文部科学省)
島田 聡 (高校教育課)	朝倉 康雄 (前橋西)	金田 知子 (富岡東)	黒岩 伸枝 (高崎)
根岸 玲恵 (西邑楽)	大小原美幸 (高高特)	前島 律子 (あさひ特)	五十嵐桃子 (長野原)
戸松 久美 (吉井)	中畑 香映 (太田女子)	森田 尚子 (前橋東)	富岡 恵美 (安中総合)
松平 康子 (尾瀬)	中澤 玲子 (高崎北)	井上 春美 (藤岡中央)	饗庭 麻里 (市立太田)
鈴木香奈子 (桐生南)	野口 瑞穂 (大間々)	伴野 和章 (太田東)	小川 唯佳 (利根商業)
斎藤真里奈 (沼田女子)	藤嶋 啓子 (関学附)	武井 康博 (伊勢崎商業)	勝山 英城 (万場)
小川 良介 (四ツ葉)	角田 幸枝 (榛名)	東 喜峰 (県立前橋)	伊藤 範秋 (北海道・別海)
坂本 将 (館林女子)			

文責：坂本 将 (館林女子)

芸術科「音楽Ⅰ」学習指導案

日 時 : 平成30年1月16日(火) 第2校時(10:00~10:50)

場 所 : 群馬県立桐生南高等学校 音楽室(3号館2階)

生 徒 : 1年C組40名(男子22名、女子18名)

指導者 : 教諭 鈴木 香奈子

1 題材名 ベートーヴェンからのメッセージ ～『第九』の魅力を探ろう～

- (1) 教材
- ・教科書「高校生の音楽1」(教育芸術社) pp.48-51
 - ・『交響曲第9番ニ短調 作品125』(L.v.ベートーヴェン 作曲)
 - ・ワークシート①～④(指導者作成)

(2) 学習指導要領の内容における位置付け

本題材は、高等学校学習指導要領芸術科「音楽Ⅰ」B鑑賞より

ア 声や楽器の音色の特徴と表現上の効果とのかかわりを感じ取って鑑賞すること。

イ 音楽を形づくっている要素を知覚し、それらの働きを感受して鑑賞すること。

ウ 楽曲の文化的・歴史的背景や、作曲家及び演奏者による表現の特徴を理解して鑑賞すること。

を指導するものである。

2 題材の目標

- 『第九』の「音楽を形づくっている要素」を知覚し、それらの働きを感受しながら、声や楽器の音色の特徴と表現上の効果との関わりを感じ取り、声楽部分の歌詞の内容や楽曲の文化的・歴史的背景との関わりについて理解したり、作曲者が楽曲に込めた思いについて考えたりして、楽曲に対する理解を深め、よさや美しさを創造的に味わう。

3 題材の考察

(1) 題材設定の理由

鑑賞においては、様々な音楽を聴き、それぞれがもつよさや美しさなどを味わうことによって、音楽体験を豊かにし、創造的な鑑賞の能力を伸ばすことを目指していく。その実現に向けて、本題材においては、「音楽を形づくっている要素」の知覚・感受を通して、声や楽器の音色の特徴と表現上の効果とのかかわりを感じ取ったり、楽曲の文化的・歴史的背景を理解したりして鑑賞していく。

本題材では、ベートーヴェンが作曲した『交響曲第9番』、通称『第九』を取り上げ、そのよさや美しさなどを味わうことによって、音楽体験を豊かにし、創造的な鑑賞の能力を伸ばすことを目指したい。『第九』東西ドイツの統一の際に演奏されたことがきっかけとなり、「歓喜の歌」が、欧州連合(EU)によって「欧州の歌」として採択されたり、自筆譜がユネスコの「世界の記憶」にリスト登録されたりするなど、誰もが知る名曲であるのと同時に、平和や統一の象徴として知られている。

以上のように、音楽史的にも世界的にも大きな意味を持ち、声楽が用いられた希有な交響曲である『第九』の鑑賞を通じて、本題材では、管弦楽と声楽それぞれの音色の特徴と表現上の効果とのかかわりや、性格

の異なる各楽章の「音楽を形づくっている要素」、また第4楽章の構成に着目しながら、ベートーヴェンがこの楽曲を通してどんなメッセージを伝えたかったのかを考える。その過程において「音楽を形づくっている要素」を知覚・感受する活動を、「ベートーヴェンからのメッセージ」を読み解く鍵を見つける活動として位置付けたい。そして、そのメッセージを読み解いた生徒自身が、後世にどのようなことをメッセージとして残したいか、そのためにどう行動したいかについて考えさせたい。このような一連の学習とすることで、創造的な鑑賞を通じて学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性」の涵養にもつながると考え、本題材を設定した。

(2) 生徒の実態

ア 音楽への関心・意欲・態度

本校では芸術科の必修科目として「音楽Ⅰ」を開設している。多くの生徒が音楽を表現したり鑑賞したりする学習に意欲的に取り組んでいる一方で、一部の生徒には自己肯定感の低さ等を原因とする消極的な姿勢や、音楽を学ぶ意義について疑問をもつ様子も見られる。しかし、他の生徒と協調しないということはなく、取り組み自体は基本的に真面目である。明るく開放的な雰囲気での授業づくりを心がけ、受容的な態度、グループワークやペアワークの積極的な導入、発問の工夫などによって、音楽への関心等がより一層喚起できると考えている。

エ 鑑賞の能力

年度当初、鑑賞についてのアンケート調査を実施した結果、中学の頃から音楽を鑑賞して感じたことや自分の意見を簡潔にまとめるよう努力したり、友人と意見を交換しながら積極的に楽曲についての理解を深めたりした経験のある生徒が多いことがわかった。一方で、多くの生徒が、鑑賞した音楽と「作曲家の生き方」や「作曲家が生きた時代背景」などとの結びつきについて考え、自分自身の生き方と重ね合わせるなどして理解を深めるまでは至っていないこともわかった。

このことを受けて、これまで表現と鑑賞を関連付ける題材を実施する際、「音楽を形づくっている要素」の働きを理解した上で、作曲者や作詞者の気持ちを考えながら紹介文を書かせる学習を行った。しかし、一部に誘導的な指導もあったため、生徒自身によって理解を深めたかについては疑問が残る。聴き取り感じ取ったことを具体的な言葉や絵などのイメージに変換させ、そこから根拠となるものに結び付ける活動などを頻繁に行うだけでなく、聴き取り感じ取ったことと作曲者や作詞者の思いと結び付けられるような指導を心がける必要がある。

(3) 教材選択の理由

本題材では、九つあるベートーヴェンの交響曲の中でも最後の交響曲、通称『第九』を扱う。ベートーヴェンの作曲した交響曲は、いずれも価値あるものとして今現在も演奏されているが、なかでも『第九』は、音楽史上においてもそれまでの交響曲の概念を覆す声楽を伴う交響曲という点で、ベートーヴェンの作曲の意図について生徒が探究しやすいと考える。また、着想から初演まで長い期間をかけたということを含めて、ベートーヴェンの『第九』に込めたメッセージと文化的・歴史的背景とを結び付けやすいと考えた。さらに、シラーの詩に基づく「歓喜の歌」は、「持続可能な開発のための教育（ESD）」における「持続可能な開発に関する価値観（人間の尊重、多様性の尊重、非排他性、機会均等、環境の尊重等）」に相当する内容であり、生徒がこれからの社会や自分自身の生き方を考える上で、大きな意味をもつ教材となると考える。

本題材で用いるワークシートの内容と学習との関係については、以下のとおりである。なお、ワークシート

②および③は、「【鍵】発見！シート」とし、『第九』の鑑賞を通して「ベートーヴェンからのメッセージ」を読み解く探究活動に用いる。

《ワークシート①》 (第1時)

他の交響曲と『第九』とを比較することで『第九』の特徴に気づき、「歓喜の歌」を歌い歌詞の内容に触れることで、「なぜベートーヴェンは『第九』の第4楽章に「歓喜」の意を含む声楽部分を付したのか」という疑問を持つ。このことで、題材を貫く問いとなる「第九を通して読み解くことのできる『ベートーヴェンからのメッセージ』とは？」という学習課題に至る。

《ワークシート② 【鍵】発見！シート①》 (第2時)

第1～3楽章よさを味わい、特徴を理解するために、いずれかの楽章を聴き、知覚・感受した内容を整理し、その楽章に歌詞をつけるとしたらどんな言葉となるかを考える。その結果を「感情」としてまとめることで「問い」に対する答えの鍵を見つけていく。

《ワークシート③ 【鍵】発見！シート②》 (主として第3時)

再び第4楽章に着目し、第1～3楽章を踏まえて第4楽章を味わうことで新たに気付くことをまとめたり、それを含めてベートーヴェンが「歓喜」を求めた理由を作曲の背景から探ったりしながら鑑賞することで、鍵を見つけていく。

《ワークシート④》 (第4時)

これまでの学習を通して、「ベートーヴェンからのメッセージ」を最終的にどのように読み解いたか、問いについての自分なりの答えを考え紹介文を書くと共に、それを受けて自分はどうのようなメッセージを後世に伝えていきたいかを考えて鑑賞する。

(4) 題材の系統と他題材との関連

これまでの学習において、「A 表現」領域と「B 鑑賞」領域を関連付けて題材を構成し、指導することは多くあったが、本題材のように「B 鑑賞」領域でのみ構成する題材は初めて実施する。「A 表現」と「B 鑑賞」を関連付けた題材においては、知覚・感受させる「音楽を形づくっている要素」を教師が限定する場合もある（今回は旋律と強弱に着目して聴いてみよう）などが、本題材においてはそれを可能な限り限定せず多くの要素について音楽的な感受を豊かに言語表現させたい。このようにして作曲家からのメッセージ（思いや意図）を読み解くことは、今後歌唱や器楽などの表現領域の学習の際にも大きな意味を持つと考えるため、本題材以降の表現活動に効果的に繋げていきたい。

4 題材の評価規準

音楽への関心・意欲・態度	鑑賞の能力
<p>① 『第九』と他の交響曲との響きの違いや、声と楽器の音色の違いや特徴と表現上の効果との関わりに関心を持ち、鑑賞する学習に主体的に取り組もうとしている。</p>	<p>① 交響曲の音楽を形づくっている要素を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気などを感受している。</p> <p>② 知覚・感受しながら、声や楽器の音色の特徴と表現上の効果との関わりを感じ取って、楽曲や演奏を解釈したり、それらの価値を考えたりして、音楽に対する理解を深め、よさや美</p>

<p>② ベートーヴェンが『第九』に込めたメッセージ (思いや意図) の表現に関心を持ち、『第九』の作曲された文化的・歴史的背景と併せて考えながら、『第九』を鑑賞する学習に主体的に取り組もうとしている。</p>	<p>しさを創造的に味わって聴いている。</p> <p>③ 知覚・感受しながら、『第九』の文化的・歴史的背景や、ベートーヴェンが『第九』に込めたメッセージ (思いや意図) の表現の特徴を理解して、楽曲や演奏を解釈したり、それらの価値を考えたりして、音楽に対する理解を深め、よさや美しさを創造的に味わって聴いている。</p>
---	---

5 指導と評価の計画 (全4時間)

時	○学習のねらい ・生徒の学習活動	評価規準 【評価方法】
1	<p>『第九』を他の交響曲と比較しながら鑑賞したり、「歓喜の歌」をドイツ語で歌ったりして、『第九』の特徴を理解し、本題材の学習内容に関心をもつ。</p> <p>○『第九』を他の交響曲と比較しながら鑑賞し、『第九』が声楽を伴う交響曲であるという特徴に気付く。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「交響曲」の定義について知る。 ・『第九』を、ほぼ同時代の「交響曲第40番 (モーツァルト作曲)」、「交響曲第7番 未完成 (シューベルト作曲)」と比較しながら聴く。 <p>○声楽とオーケストラそれぞれの音色の特徴を聴き比べたり、「歓喜の歌」を歌ったりし、本題材を貫く問いについて自分なりの考えをもつ。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・声楽部分とオーケストラ部分を聴き、それぞれの音色の特徴を比較して、よさや美しさを味わうとともに、「歓喜の歌」の歌詞の内容を理解する。 ・ドイツ語の歌詞を確認しながら、「歓喜の歌」を歌う。 ・『第九』の各楽章をダイジェストで聴き、全4楽章のうち第4楽章にのみ声楽が含まれることに気付く。また、このことを「ベートーヴェンからのメッセージ」とし、ベートーヴェンは何かを伝えたかったのかという本題材の学習課題について、現時点での自分の考えをもつ。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p>第九を通して読み解くことのできる「ベートーヴェンからのメッセージ」とは？</p> </div>	<p>関-① 鑑-① 【観察】【発言】 【WS①】</p> <p>鑑-① 【観察】【発言】 【WS①】</p> <p>関-① 【観察】【発言】 【WS③】</p>
2	<p>《エキスパート活動》ベートーヴェンからのメッセージを読み解く鍵を探す活動①</p> <p>『第九』の第1～3楽章について、担当するグループでそれぞれの楽章を聴き、知覚・感受したことを根拠に紹介文を書き、担当する楽章のよさや美しさを味わう。</p> <p>○3つのグループに分かれ、それぞれが第1楽章・第2楽章・第3楽章について鑑賞する。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p>第1～3楽章はそれぞれどんな音楽で、どんな感情として表現できるだろう？</p> </div> <ul style="list-style-type: none"> ・第1～3楽章を担当する3つのグループに分かれ、各楽章の特徴的な3つの部分 (Scene) を聴き、①第一印象をまとめる。 ・3つの部分 (Scene) について繰り返し聴き、②聴き取ったこと・感じ取ったこ 	<p>関-① 【観察】 【WS②】</p>

<p>・『第九』の中でベートーヴェンは第1～第3楽章を否定した上で第4楽章に付した「歓喜の歌」を通じ、またそれを様々な形で表現することで、人と人とかかわりあう社会の中で何を大切にすべきだと訴えたかったのか想像してみると共に、そのように想像したベートーヴェンの思いと共感する自分自身の考えをメッセージにする。</p> <p>○自分自身で書いた紹介文の視点を持った上で、『第九』第4楽章を鑑賞する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「歓喜の歌」を歌唱し、その美しさやメッセージ性を味わう。 ・生徒1人ひとりがベートーヴェンから受け取ったメッセージをどのような形で社会に発信していくかについて考えながら鑑賞し、『第九』のよさや美しさを味わう。 	
--	--

6 指導方針

本題材では「知識構成型ジグソー法」を用いて授業を展開していく。知識構成型ジグソー法とは、設定された問いに対し、1人で考えられるだけの答えを1人で探すのではなく、問いの内容を分離してそれぞれの内容のエキスパートを育成し、その結果をジグソーパズルのように改めて構成することで深い学びに結び付けるための活動である。



(東京大学 CoREF と連携した埼玉県教育委員会「学びの改革」の推進 HP より引用)

本題材での問いは「第九を通して読み解くことのできるベートーヴェンからのメッセージとは？」というものになる。『第九』第4楽章のよさや美しさを真に味わうためには、第1～第3楽章を鑑賞することは必須であると考えられる。しかし、第1～第3楽章を一斉授業で鑑賞し、それぞれを味わう学習過程を設定した場合（本来の「鑑賞」はそうあるべきであると考えられるが）、時間的な制限からただ聴くだけの活動となり深く掘り下げることができず、また深く掘り下げようとすると同じような学習活動が3度繰り返されるなど、生徒の知的好奇心の減退にもつながりかねないと考えられる。

そこで、先述の問いに向かう学習活動として、第2時では第1楽章・第2楽章・第3楽章のそれぞれについて担当する生徒を決め、三つのグループで《エキスパート活動》を行う。ここで生徒は、担当する楽章をただ聴くのではなく、「音楽を形づくっている要素」の知覚・感受を通し、根拠をもってその楽章についてプレゼンテーションできるエキスパートとなる。

次に、第3時で、第1～第3楽章を担当した生徒が1人ずついる新たなグループを編成し、クラス全体で第1～第3楽章を鑑賞しながら、エキスパート活動で知覚・感受した内容や理解したことについて、それぞれのグループ内でプレゼンテーションする。一方的にプレゼンテーションしたりそれを聞いたりするだけでなく、その楽章に関する質問や疑問はグループ内のエキスパートに確認をする。それによって自分が担当した楽章との関わりを考え、問いへの答えを模索していく。この活動が《ジグソー活動》である。

これらの過程を通して、最後は個人として問いに対する答えを見出していく。題材の初めに自分1人で問いの答

えを探そうとしたときに比べ、知識構成型ジグソー法を通して自分なりにどのような答えを導き出すこと（価値判断）ができたかを評価したい。

知識構成型ジグソー法では、生徒1人ひとりが「エキスパート」としての自分の役割を自覚し、対話を通して、主体的・協働的に問いに取り組んでいくことで、自己有用感が高まり学ぶべき内容をしっかりと定着させることができると考える。芸術科においては、問いへの答えが必ずしも一つでないため、運用は難しい部分もあると考えるが、教師が情報や答えを与えるのではなく、生徒が自身や他者の気づきを組み合わせながら1人では答えを出せない問いに対して答えを導いていくため、教師の誘導を極力抑え生徒の豊かな発想を引き出すことにつながると考える。

7 本時の学習

(1) 本時の目標

- ① 各エキスパートのプレゼンテーション《ジグソー活動》を通して第1～第3楽章のよさや美しさを味わう。
- ② 第1～第3楽章の表す感情を踏まえた上で改めて第4楽章を鑑賞し、新たな事実や、よさや美しさ（ベートーヴェンからのメッセージを読み解く鍵）を発見する。

(2) 本時の学習（本時は4時間扱いの3時間目）

時 間	○学習のねらい ・生徒の学習活動	<ul style="list-style-type: none"> ・教師の働きかけ及び指導上の留意点 ◆学習活動における具体的評価規準【評価方法】 ◎Aと判断する場合のキーワード △Cと判断される生徒への支援・働きかけ
導 入 3 分	○前時までの復習をし、学習課題を確認する。 ・本題材を貫く問いを確認し、それに対する答えに迫るための鍵を探していることを再確認する。	・必要に応じて前回のスライドを参照させる。
展 開 20 分	○各楽章のエキスパートが、担当の楽章についてグループ内でプレゼンテーションする。 ・3つのエキスパートグループを編成し直し、各楽章のエキスパート1人ずつで構成される新しいグループを編成する。 ・第1～第3楽章について、グループ内でエキスパートが《WS②》を用いてプレゼンテーションし、エキスパート以外の班員はプレゼンテーションに基づき鑑賞することで担当外の楽章について理解する。《ジグソー活動》 ・必要に応じてエキスパートに質問する。	<ul style="list-style-type: none"> ◆関-②【プレゼン】【WS】 ◎知覚・感受したことや、それらから導かれた「歌詞」や「感情」を根拠にプレゼンテーションしている。また、質問に対して根拠を持って応対している。 △WSに予め記載されていることや自身でとったメモを根拠とし、説得力を持たせる。 ・自分自身で分析していない楽章についての疑問を、質問によって解消させる。 ・エキスパートのプレゼンテーションについてメモをとらせる。
24 分	○第1～第3楽章の表す感情を踏まえ、改めて第4	

	<p>楽章を鑑賞し、新たな事実を発見したり、学習課題について答えを共有したりして、そのよさや美しさを味わう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・第4楽章の冒頭部分を聴き、第1～3楽章の断片によって回想していることに気付くとともに、それらの間にレチタティーヴォの部分があることにも気付く。 ・教師の説明により、レチタティーヴォの部分は、ベートーヴェン自身が作詞した部分であり、それは第1～3楽章だけでなく、第4楽章の冒頭部分も否定していることを理解する。 ・「レチタティーヴォ」のみを聴き、その特徴を理解する。 ・何故自身で作曲した第1～3楽章を否定したのか、その先に出てくる歓喜の主題や、ベートーヴェン自身の作曲の背景と併せて考えながら鑑賞する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・複数回聴かせ、2回目以降はプレゼンテーションソフトによって楽譜を見ながら聴かせることで、気付きを促す。 ・ベートーヴェン自身が作詞した詩の内容や、ベートーヴェンが作曲時に残したメモを紹介し、それが否定を表しているということを理解する根拠とさせる。 ・レチタティーヴォの特徴（低音の弦楽器による旋律など）を整理させる。 <p>◆鑑一③【観察】【WS】</p> <p>◎何故ベートーヴェンが第1～3楽章を登場させた上で否定したのかということを、登場するスケッチや歓喜の主題、またベートーヴェン自身の作曲の背景と、実際の楽曲のよさや美しさと併せて考えながら記述することができる。</p> <p>△鑑賞する上でのポイントを整理し、再提示する。</p>
<p>まとめ 3分</p>	<p>○本時で発見できた「鍵」をまとめ、次時への見通しを立てる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ベートーヴェンからのメッセージを読み解くための鍵としてどのようなものが発見できたか個人でまとめる。 ・次時への見通しを立てる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自己評価カードを用いる。 ・次時では第4楽章を最後まで味わい、ベートーヴェンからのメッセージを各自で読み解くことを予告する。